The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Jonathan Fletcher, ”Violence & Civilization : An Introduction to the Work of Norbert Elias”, Polity Press, 1997
Author(s)	内海, 博文
Citation	年報人間科学. 1998, 19, p. 281-286
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Jonathan Fletcher

Violence & Civilization
— An Introduction to the Work of Norbert Elias

Polity Press, 1997

内海博文

七〇年代におけるノルベルト・エリアスの業績の「発見」以降、エリアス研究はヨーロッパ諸国を中心として、ゆっくりとではあるが確実な蓄積を積み重ねてきた。この流れにおいて検討の中心となってきたのは、何よりもまず『文明化の過程』である。ここから、例えばエリック・ダニングらによるスポーツについての社会学的研究をはじめとして、『文明化の過程』によって示されたエリアスの議論の可能性を展開させる幅広い試みが生み出されてきた。

こうした従来のエリアス研究に対し、近年重要視されはじめているのが、ドイツ語版が一九八九年という比較的最近になって出版された『ドイツ人論』である。イギリスの社会学者ジョナサン・フレッチャーもまた、エリアスの業績を扱った博士論文に修正を加えた本書において、「かなりのスペースを…とりわけ『ドイツ人論』におけるエリアスの業績についての説明に割」いている。

『ドイツ人論』を検討の中心に据えたフレッチャーが掲げる問題意識は、ひとりフレッチャーの問題であるにとどまらず、『ドイツ人論』を重視するエリアス研究に対して重要な出発点を与えている。この問題意識は、フレッチャーが掲げた本書名『暴力と文明化』に関する『エリアスの業績についての序論』に明確に表現されている。すなわち、エリアスが『文明化の過程』において展開した「文明化civilization」についての議論は、確かに一方で先に述べたような成果を生み出してきたが、他方で「ナチズムの台頭やホロコーストといった問題に取り組むことができない」がゆえに、「目的論的、進化論的、そして過度に楽観的」とする厳しい批判にも晒されてきた。

だがこうしたエリアス批判を繰り広げる多く論者は、「『文明化の挫折』に関する理解を発展させようとした彼［エリアス］の隠された意図を見落としている」。エリアスの研究の契機は、何よりもまず二〇世紀の前半のドイツでユダヤ人として味わった「エリアスの経験と、その結果として生じた、それらを理解したいという願望」にある。こうした願望に基づいて書かれた『文明化の過程』は、「一九二〇、三〇年代のヨーロッパ社会における社会的危機に関して、より距離を置いた視座を発展させる手段」であり、この『文明化の過程』を分析手段として、まさしく「暴力と文明化というテーマ」が展開されたのが『ドイツ人論』である。ゆえにエリアス批判が依拠するエリアスの業績とナチズムとの間の齟齬は、あくまで「見かけ上」のものにすぎない。こうした問題意識から次のような課題が導かれる。すなわち、「暴力、文明化、そして非文明化に関わる本質的な主題や、エリアスの多面的な業績の理解において核となる主題についてのエリアスの説明を、明確かつ正確に要約する」ことにより、「ナチズムの台頭やホロコーストといった問題」に対するエリアスの研究を明らかにし、これをもって従来のエリアス批判に答え、さらには「エリアスの業績における暴力、文明化、および非文明化の間の関係」についての議論を発展させるという課題である。

こうした課題への取り組みとしての本書におけるフレッチャーの議論は、「二つの主要な部分に分けられる」。前半部を構成する二章から四章では、エリアスの業績のなかでも「より理論的な構成に焦点が合わされ」、続く五章から七章からなる後半部では、前半で論じた「エリアスの諸概念」が、エリアスによる「イギリスやとりわけドイツ」といった「歴史的事象の説明にどのように織り込まれているか」が批判的に考察される。

まず前半部の第二章「文明化、ハビトゥス、そして文明化の過程」、第三章「暴力、ハビトゥス、そして国家形成」では、本書の議論の前提をなす「文明化の過程についてのエリアスの理論に関する解説、批判、要約」がなされる。ここでのフレッチャーの主要な関心は以下の二点である。

一点目は、エリアスの「文明化」概念から「曖昧さ」を除去することである。『文明化の過程』において、「文明化」という概念を用いることでエリアスが扱ったのは「物理的暴力を遂行したり目撃したりすることに関する羞恥心や嫌悪の閾値に関する一般的な発展」である。ゆえにエリアスの「文明化」概念は、「西洋のエリートが特定の歴史的時代において自分たちを描写する象徴的概念として発展」していった、「『より高次の』状態、しばしば以前よりも『より良い』」という「イデオロギー的で観念的な含意」を有した日常語としての「文明化」とは、「かなり距離をおいた方法で用い」られている。だがエリアスの「文明化」概念の用法は、ときとしてその意図に反する形で「理想としての文明化」という規範的意味合いを混合させる。それは「とりわけナチスによるジェノサイドについて述べるときに、『野蛮 barbarity』もしくは『野蛮化 barbarization』のような語彙を用いている」場合に顕著になる。ゆえにフレッチャーは、「文明化」概念から規範的な側面を切り離して、「行動

規範や感情規範の基準の、方向性を有した変化」を表す記述的概念として厳密に定義し直す。

二点目は、エリアスの議論における「暴力と文明化の間の概念的な関連についての洗練化と明示化」である。エリアスの議論において、「衝動的な暴力の目撃や実行に関してより敏感にな」っていく「文明化」の過程は、暴力が「徐々に『兵舎への制限』、つまり軍隊や警察によって、もしくは特定のスポーツの競技などの制御された状況においてのみ正当に実践されるようになる」という「国家形成や平和化の過程との連関のなかで」進展する。ゆえにこの過程において「暴力」は、「存在の封殺というよりも、むしろ視野から除外されている」にすぎず、「暴力に関する個人的な自己抑制の型」は、常に「暴力の脅威と暴力のある程度の行使を内包している」。ここに、エリアスの議論において「暴力と文明化」は「正反対の概念ではな」く、両者は「社会発展の全過程において分かち難く結び合わされている」ことが明らかなる。そして「暴力」を内包しているがゆえに、「文明化」は「決して完成することのない、そして常に危険に晒されている」ような過程なのである。

以上のようなエリアスの議論の批判的要約に基づいて、第四章「アイデンティティ、暴力、そして過程モデル」では、エリアスの議論が「いかにして暴力的な社会過程を説明しうるか」が考察される。ここでフレッチャーが提示するのが、「エリアスの議論に論理的には内包されているが、明示されていない」ような「文明化の過程の『反転』」のモデル、すなわち彼が「非文明化 decivilization」と呼ぶモデルである。この「非文明化」のモデルは、エリアスの「文明化」の議論とナチズムのような暴力的現象との間を繋ぐモデルとして提示される。ゆえに本章でのフレッチャーの議論は、本書の核心をなしている。フレッチャーは、エリアスの「文明化」に関する議論を支える視座についての考察から始める。エリアスの議論は、多極的な権力バランスとそこから生じる緊張関係を伴った諸個人の社会的結合、およびこの社会的結合に基づいて生じる、「堅固に社会的ハビトゥスの層に刻み込まれている」と同時に「可動的で常に流動的」な「帰属意識」を基盤とする。こうした社会的結合と帰属意識の変化を考察するにあたりフレッチャーは、エリアスが「卓越者-アウトサイダー関係 established-outsider relations」と呼ぶ過程的なモデルを重視する。すなわち、「不均等な勢力バランスによって特徴づけられる」社会的結合において、「支配的な勢力的地位」にある「卓越者」は、自らの権力資源に基づくさまざまな手段を用いて、「アウトサイダーに烙印を押し、彼らを独占化された権力資源から排除」し続けることで、自らの勢力を維持・強化する。この「卓越者」が「アウトサイダー」に与えるスティグマは、「通常、アウトサイダーの自己イメージや自意識に入り込み、……彼ら自身の権力資源を増大させる能力を弱める」。だが、「卓越者とアウトサイダーの間の権力比率が後者に移行した場合、もしくは卓越者が彼らの独占を失った場合」、その時「アウトサイダー集団の成員によって保持されてきた劣等感情は、消滅するか弱ま」り、ここに帰属意識の変化が生じる。この「卓越者-アウトサイダー関係」のモデ

ルは、「その動態に巻き込まれた人々の願望や意志に対して比較的もしくは完全に自律的」な過程のモデルであり、例えばそれは「以前の中間階層が、もっとも勢力を有した国家内的集団の立場へと達」することで生じた「国民化」のような変化から、「二〇世紀における労働者、女性、同性愛者、エスニック・マイノリティ、被植民地の人々、そして子供」に生じた変化まで、「広い適応範囲を有している」。そしてこうした過程的なモデルを用いて捉えられる社会的結合と帰属意識の変動過程のなかで、「暴力の制御」が適切に行われる場合、人々における「行動規範や感情規範の基準の、方向性を有した変化」としての「文明化」が進展する。この「文明化」の方向の診断のためにエリアスが明示した重要な基準が、①「他者による強制から……自己抑制へのバランスの移動」、②「より均質的、包括的、安定的、かつ細分化した自己抑制の出現を生み出す、行動や感情の社会的標準の発展」、③「人々における相互的なアイデンティフィケーションの範囲の拡大」である。だがこうした「文明化された行為の防護壁」は、「社会的脅威や暴力のレベルの増大」によって「きわめてすみやかに砕け散る」。その反転の典型が、エリアスにとっての研究の契機であるナチによる大量虐殺である。エリアスはこの「文明化された行為」の「反転」を表すために、しばしば曖昧な意味においてであるが、「非文明化」という概念を用いている。フレッチャーはこの「非文明化」概念を重視し、その洗練を試みる。すなわち、「定着者-アウトサイダー関係」に基づいて生じる社会的結合と帰属意識の変動過程のなかで、「暴力独占の（国家）制御における減退や社会的結合の解体」が生み出される場合、ここに互いに「遅かれ早かれ他のものの引き金」となるような次の三つの現象のいずれか、もしくはすべてが生じる。これらの現象は、エリアスの示した「文明化の基準」を逆転させることでフレッチャーが導き出した「非文明化の基準」であり、それはすなわち①「他者による強制と自己抑制の間のバランスが他者による強制へと変化」、②「あまり包括的でなく不安定で多様な自己抑制の形態を生み出す、振る舞いと感情の社会的標準の発展」、③「我々-アイデンティティの範囲の縮小」である。これらの基準がある社会的結合において顕在化するとき、そのとき「文明化が反転し、その挫折へと近づく」。これがフレッチャーが「非文明化」と呼ぶ過程のモデルである。

そして後半部分の五章以下（五章「イギリスにおける社会的ハビトゥスと文明化の過程」、六章「ドイツにおけるナショナリズムと非文明化の過程」、七章「ドイツにおけるジェノサイドと非文明化の過程」）では、前半部分でのエリアスの議論の整理と展開に基づいて、イギリスおよびドイツの歴史的現象についてのエリアスの言及が緻密かつ詳細に要約される。イギリスについてのエリアスの言及は、「九〇〇年に遡る比較的連続的で安定的な国家形成の過程や平和化」と、「帝国の中心としての上流階層の場」における「独特に個人主義化され、自己抑制化され、そして安定した社会的ハビトゥス」の形成という「文明化」の過程を浮き彫りにする。それに対しドイツについてのエリアスの言及は、一方で「中世からのドイツ帝国のゆっくりとした、しかし間断なき縮減」という長期的発展を、

他方で「徐々に相互依存を強める西ヨーロッパの諸国家の構成のなかでのドイツの統合」と「国家的勢力の鍵となる諸独占の操作をめぐり、増大していく大衆…の統合」という短期的過程を明らかにする。これらの過程の混合のなかで生み出されたのが、「第一次世界大戦後の皇帝の退位と結びついた帝国の上流社会の非統合化」、「帝国の卓越者という優越者と共和国を支えていた人々の間」の緊張の増大、「義勇軍を含めたテロリスト集団」による国家によって独占化された暴力の侵犯、「警察や軍隊の暴力使用を通じた社会的脅威の増大」などでである。ここに「相互的なアイデンティフィケーションの範囲における齟齬」や「他者による強制と自己抑制との間のバランスにおける、集団への忠誠や序列的な命令という強制への変化」といった、先にフレッチャーが「非文明化の基準」として提示した指標が顕在化し、「ヒトラー時代の非文明化の急騰」を用意したのである。

そして以上のようなエリアスの議論の要約とともに、フレッチャーはその議論の修正と補完も試みている。なかでも重要なのは次の二点である。まず一点目は、「非文明化のモデル」の適用範囲の限定性である。すなわちワイマールの崩壊に続いたナチスによる大量虐殺自体は、「暴力の強固な国家独占と減退傾向にはない経済と結びついて生じた」。このことは、「暴力独占の（国家）制御における減退や社会的結合の解体」を前提とする「「その「非文明化」のモデルが修正される必要があるか、もしくは矛盾した証拠によって論破されるという結論を導く」。この問題に対しフレッチャーは、「非文明化」のモデルを「数世代にわたる長期的な構造化された過程の文脈において生じる短期的な過程」に限定することにより回避する。二点目は、「ナチスによる大量虐殺の実行」が「文明化の過程の意図せざる結果として」、すなわち「国家的暴力の効果的運用と結びついた科学技術や官僚制の効率性に対する制御や依存の増大」と結びついて生じたという事実の分析が、エリアスの議論に欠如していることに対する補完である。この補完のためにフレッチャーは、ジグムント・バウマンの次のような議論を批判的に援用する。すなわち、「社会的組織の近代の形式」と結びついた「文明化された規範として反応する最大の傍観者」は、人々に対し「彼ら自身の行為のすべてに対して責任をとることができない」ようにすることにより、「強烈かつ野蛮に物事に反応するよう忠告し導く」。ゆえに「『文明化された』という刻印は大量虐殺の隣にあり、それを促進するのである」。こうした修正と補完を通じて、エリアスの議論は「ナチズムの台頭やホロコーストといった問題」に対して「調整」され、「ナチスドイツという現象の動態についてのわれわれの理解を増すために用いることが可能」であることが示されるのである。

以上、エリアス研究としての本書の議論を簡単に再構成してきたが、本書はまた、エリアスの議論が現在の社会理論に対してなしうる示唆の可能性をも示している。それは、本書の結部にあたる八章においてフレッチャー自身が述べているように、エリアスの文明化に関する議論が「暴力的な社会過程を研究するためのモデルとして役立ちうる」という点に求められる。だがフレッチャー自身も言う

ように、エリアス自身によってあまり体系的な形で語られなかった「文明化」と「非文明化」をめぐる問題に対する本格的な取り組みはまだ始まったばかりである。「経験的証拠への言及」を用いつつ、「文明化過程と非文明化過程の連関」についての議論をより一層展開させていくことは、今後のエリアス研究に課せられた最も重要な課題の一つである。